

第127回貴重書展



源氏物語点景

—小さな脇役たち—



鶴見大学図書館

平成23年1月12日(水)～1月29日(土)

後援 紫式部学会・武蔵野書院

あけましておめでとう存じます。

新春恒例の貴重書展示は、源氏物語研究所の担当です。当研究所の最大の仕事は、と改まって申しあげるのもおかしなものですが、源氏物語とそれに関連する質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確な調査を行うことにあります。大衆伝達手段に乗って華やかに打ち出される言説や、あるいは犀利を装った所謂現代的な議論は、一時人目を驚かすことはあっても所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代わられます。時を超えて学問を支え、豊かな源泉となって研究を潤し続けるものは、古典籍において他に見あたりそうもありません。私たちはこれまで蓄積された優秀な蔵書に良質の書物を加えるべく、限られた予算を最大限有効に活用し、目録を眺め回し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めます。その結果、学界のみならず一般にもよく知られるところの、本学の優秀な貴重書コレクションが形成されました。

さて今回は、源氏物語の中から脇役、それも人間以外の存在を取り上げてみました。光源氏も紫の上もほとんど顔をださない、ちょっと変わった展示です。しかし虫や鳥や草花などだけでも、一応の興行が出来るほど物語の世界は豊穰広大である、と言えるでしょう。また表紙文様あるいは料紙装飾、箱の意匠などの面では、むしろこれらの小さな点景こそが、当該巻の筋立てを暗示し季節感に深みを添える点で、重要な役割を演じてきました。

ともあれ「なにもなにも小さきものは、みなうつくし」（枕草子）、お楽しみいただければ幸いです。

平成辛卯青陽中浣

源氏物語研究所所長 高田信敬

*立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館の典籍のみでは足りない箇所個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

展示目録

* = 個人蔵

I その舞台

- 1 蒔絵箱入源氏物語 江戸時代前期写 列帖装54冊
(参考)紫文蠶之囀 享保8年(1723)刊 袋綴5冊
- 2 源氏物語絵巻 六条院の野分 幽遠斎筆 天保2年(1831)写 卷子本3軸
- 3 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅*
- 4 おさな源氏 寛文10年(1670)刊 袋綴10冊

II 季節の草花

- 5 源氏物語歌留多 江戸時代後期作 読札・取札共108枚1組
(参考)源氏物語 室町時代初期写 列帖装3冊
- 6 嫁入本源氏物語 江戸時代前期写 列帖装12冊
- 7 伝梶井宮筆 源氏物語須磨拔書 江戸時代前期写 卷子本1軸
- 8 絵入源氏物語 江戸時代前期刊 小型本 袋綴60冊*

III 鳥・虫・犬・猫

- 9 源氏物語浮舟断簡 伝橋本公夏筆 内曇四半切 室町時代後期写 台紙貼1葉*
- 10 升形本源氏物語 表紙裏に版本反故使用 江戸時代前期写 列帖装5冊
- 11 源氏物語色紙帖 伝貞常親王筆 室町時代後期写 折本1冊
(参考) 源氏物語五十四帖絵尽 豆本 文化9年(1812)刊 版本 袋綴1冊*
- 12 絵入源氏物語 慶安3年(1650)山本春正跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊
- 13 源氏絵宝枕 正徳3年(1713)刊 巻4欠 袋綴3冊

IV 身の回りの小物

- 14 源氏物語 小型写本 江戸時代前期写 列帖装54冊
(参考)源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾 明治14年錦栄堂大倉孫兵衛刊 折本2冊
- 15 絵入源氏物語 横本 万治3年(1660)刊 袋綴29冊
- 16 源氏物語 濡標(別本) 室町時代後期写 折紙列帖装1冊
- 17 源氏物語小鏡 小型絵入本 寛文6年(1666)刊 袋綴3冊
(参考)源氏香 江戸時代後期写 折本1冊

I その舞台

どんな名優も、舞台なしには活躍出来ません。愛すべき脇役たちが登場する前に、舞台のいくつかをご紹介します。宮中・六条院・野の宮・宇治川の絵のそれぞれに、構図の工夫や鮮やかな賦彩、あるいは時代を経たもののみが持つ落ち着きを味わってください。

1 蒔絵箱入源氏物語 江戸時代前期写

列帖装54冊

縹色地に金泥・金箔を贅沢に用い、当該巻の内容にあわせた絵柄を持つ紙表紙（縦23.7、横16.7糎）。押発装あり。表紙中央に絹地金泥下絵題簽（縦14.9、横3.0糎）を押し、本文と別手の優美な書風で「桐つほ」（はゞき木）と書く。卍繋ぎ文様艶刷りの金見返し・紺の綴じ糸とともに、制作時の豪華な原態を伝える。

本文は上質の斐紙に毎半葉10行書写を原則とし、まま朱の合点・句読点あり。朱句読点を持つ伝本には河内本が多いけれども、掲出本は青表紙本系肖柏本・三条西家本に類する。第1冊



桐壺巻の表紙は、御簾と薔格子が備わった内裏殿舎を描き、庭に桐の木をあしらって「桐壺」（淑景舎）の表現とする。第2冊帚木は左上方より降り注ぐ五月雨と宮中の建物、題簽右脇に灯台が見えるので夜景（左図参照）。これらが雨夜の品定めを意味することは、容易に推されよう。人物を描かない、いわゆる留守模様の趣向である。

桐壺・帚木の表紙および全54冊を収めた蒔絵箱も併せて展示。箱は金箔押しの梅・唐草文様金具を用い、金・銀・螺鈿等にて『源氏物語』の巻名・草花などを描き出す。2列3段に組み込まれた引き出し前面には巻名の金高蒔絵。このような工芸意匠では、主要な登場人物より小さな動植物の方が活躍する。

(参考)紫文蠶之轉 享保8年(1723)刊

袋綴5冊

銀泥草花文様下絵の縹色原表紙（縦27.2、横18.8糎）。その中央に朱紙題簽（縦18.7、横3.5糎）を押し、「紫文蠶之轉 摘趣（〜うつせみ）」と刻す。各冊題簽右下に「カ」と小さく墨書。見返し、本文共紙の楮。本文は四周単辺（縦23.5、横16.9糎）内に毎半葉11行（第1冊摘趣）・15行（第2冊きりつほ以下）、上方に頭書用の欄（約6.0糎幅）を設け、漢字平仮名交じり、ほとんどの漢字には振り仮名を施す。各冊巻首に「阿波国文庫」「不忍文庫」の朱蔵書印あり、屋代弘賢（1758～1841）の旧蔵たることを証す。国学者・能書・蔵書家として知られた弘賢は、阿波徳島出身の儒者柴野邦彦（栗山、1736～1807）と交流があり、その縁で膨大な量の書物を徳島藩主蜂須賀齊昌（1795～1859）に献上、「阿波国文庫」の重要な構成要素となる。

版心「紫文摘趣 一（〜十二終）」。享保6年8月15日釣酔子（多賀半七）序、同8年9月刊。刊記「享保八癸卯秋良辰／甲陽府中仕官／作者 多賀半七／甲州府中柳町三丁目／清水九

左衛門弁事／武江日本橋南壺町目／須原屋茂兵衛梓行／此次に夕かほ若むらさき全部4冊追而板行」。江戸須原屋が実質的に制作担当したのであろうが、三都以外の出版例として珍しい。原装のまま伝来した銀泥下絵の特装本である。摺刷佳良だが版木に小欠損を見、やや後摺と思われる。

『源氏物語』の本文を俗語に改め、さらに頭注を施した点が新機軸ではあるけれども、少し作品への関心が高まると、よりどころとなる原文を別に用意しなければならなくなるので、結局読者にとっては二度手間か。あまり流布しなかったのは、原本文を欠くところが好まれなかったゆえであろう。出版は空蟬までの5冊のみ、しかし宿木に至る稿本72冊分が残る(静嘉堂文庫)。

展示箇所は、第3冊「はき木 本」3丁ウラ・4丁オモテの見開きで、雨夜の品定め場面。床の間・掛け軸・雪洞風の照明具など、室内描写に平安時代宮廷の面影はほとんど感じられず、いかにも江戸のお屋敷らしい風情に変えられている。

2 源氏物語絵巻 六条院の野分 幽遠斎筆 天保2年(1831)写 卷子本3軸

薄手楮紙(縦28.6、横38.0糎)に、原則として『源氏物語』各巻1図を描き、全54図を3巻に仕立てるが、橋姫巻に2図あり、次の椎本巻の分を欠く。継紙状態で伝来し、朽葉色絹表紙と牙軸は当館に入ってから調製である。外題は貞政少登先生(前独立書人団理事長)の揮毫。

上巻冒頭に「源氏五十四帖 探幽」と墨書した楮紙(幅約5糎)。汚れの状態から見て、もと端裏書であったものを巻頭に張り継いだのであろう。さらに1紙(幅約28糎)を続けて「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同中／同下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写」の識語。これに従うならば、狩野派の巨匠探幽(1602～1674)の原画を、天保2年(辛卯、1831)に模写したことになる。しかし各々の図柄と「五十四帖／引歌」以下の文言からすれば、**12 絵入源氏物語**を典拠としていることは確実である。探幽が版本の挿絵を範として作画を行うこともありえないではなかろうけれども、他に文証なく、ただちには首肯しがたい。

上巻13図・中巻20図・下巻21図の内から、野分の吹き荒れる六条院を選んだ。懸命に御簾を押さえる女房たちの姿には、裳・唐衣のかしこまった正装ゆえに、一層のおかしみを感じられる。狩野派の強い描線に、淡い賦彩がよく調和した、さわやかで嫌みのない画面である。

3 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅*

上方に賢木の本文抜書、下方に野宮を描いた源氏物語絵(縦91.7、横38.8糎)。絵そのものは江戸時代のごく早い頃、あるいは安土桃山時代まで遡りうるか。原態は複数の場面を備えた屏風絵もしくは障子絵であったろう。賢木の本文(大成335・336頁)は江戸時代中期の後補と推され、絵1枚毎に鑑賞されるようになってから、本文の書き入れが行われたらしく、墨と料紙とのなじみの悪いところがある。六条御息所の歌第5句「かさしぞ」(諸本「さか木ぞ」)は珍しい異文。

晩秋9月の色づく木々を点綴し、黒木の鳥居と小柴垣が描かれていて、野の宮の図であることは一目瞭然。面貌の描き分けは精細であり、衣紋の書き込みや建築物の線引きも丁寧かつ確かな技量を示す。ただし、処々に落剥や料紙の割れが見られ、残念ながら補筆も

少なくない。上方の本文に「さかきをいさゝか折りて…をとめごがあたりとおもへば／さかき／ばの／香を／なつかしみ／とめて／こそ／おれ」とある通り、榊の枝を画中に描く



のが習いである。掲出の絵では、顔料は落ちているけれども畳の縁の上に墨書き下絵の痕跡がわずかに残っている（左図参照）。

4 おさな源氏 寛文10年(1670)刊

袋綴10冊

『源氏物語』を要約し、幼童婦女子のためにわかりやすく書き改めた梗概書。巻頭に著者立圃の序・登場人物の略系図を置き、第3丁オモテより桐壺以下のあらすじを述べる。親しみのもてる著作とすべく、挿絵122図を入れる。その原拠は、同じく立圃の作である『十帖源氏』。これををさらに簡略化し、絵柄のほぼすべてを転用。初心者あるいは女性読者に広く受け入れられたらしく、寛文6年版以下、寛文10年版・延宝9年版等10種ほどの版本を見る。掲出本は寛文10年版で、子持ち枠の刊記に「寛文十庚戌歳孟春吉旦／書林山本義兵衛梓行」と刻す。

紺色無地表紙紙（縦27.0、横18.3糎）左肩に厚手楮紙題簽（縦17.3、横3.5糎）を押し、「おさなけんしきりつはより／ゆふかはまて一之上」の如く刻す。五ツ目綴じの原装。通常は5冊仕立てであるが掲出本は10冊、ある種の特製本と思われる。ただし巻の途中で分冊されることがあり、原態はやはり5冊本。

本文匡郭なし、每半葉11行21字程度。絵は四周単辺（縦19.0、横15.5糎）とする。

野々口立圃（1595～1669）は、京にて雛屋を営み、和歌・連歌俳諧・書跡・絵画の道に秀で、多くの門人を育成した才人である。『源氏物語』についても、すでに『十帖源氏』述作の経験があり、絵・版下共に手慣れた仕上がりとなっている。



展示箇所は、巻五下（第10冊目）から柴舟の行き交う宇治川を眺める浮舟と匂宮。手本とした『十帖源氏』の挿絵と比較してみてください。『おさな源氏』（右上図参照）の人物や衣紋は少し省略されていますが、当然ながらとてもよく似ています。

II 季節の草花

『源氏物語』において、人の生き方に寄り添い、やさしい表情を見せる名脇役は、なんと言っても四季の草花でしょう。手紙を結びつけたり人柄を暗示したり、その働きはさまざまですが、書物の下絵や表紙の意匠に用いられた植物も見逃せない存在です。

5 源氏物語歌留多 江戸時代後期作

読札・取札共108枚1組

銀覆輪を施した厚紙（縦7.6、横5.1糎）に金揉箔を散らし、和歌と絵とを手書きする歌留多。『源氏物語』各巻より和歌1首を取り上げて、その上下句を読み札・取り札に配する。読み札には上句に加え、当該巻と縁のある景物のしゃれた図柄、取り札は下句の散らし書き。

掲出の歌留多は人物は登場させない趣向で制作され、一種の留守模様。絵には顔料の落剥がほとんど見られず、54帖分108枚揃った美品である。緑地小葵文緞子の2帙に収め、コハゼは銀。黒漆塗り箱が付属する。贅沢で気の利いた遊び道具と言えよう。愛らしく草花が描かれた夕顔・梅枝を展示する。「夕顔／よりてみは／それかとも／みめ／たそかれに」・「梅枝／花のかは／ちりにし／枝に／とまらねと」、それぞれの下の句はご自分で。

(参考)源氏物語 伝下冷泉持為筆 室町時代初期写

列帖装3冊

素朴な風合いの厚手斐楮混漉料紙を用いた本文共紙表紙（縦27.1、横21.0糎）の中央に「ゆふかほ（～さか木）」と打付け書きするのは本文と別手のようである。どの冊にも首尾に遊紙各1丁、墨付5括44丁（夕顔）・4括30丁（紅葉賀）・6括64丁（賢木）、3冊すべて1手、同筆と思われる朱合点・傍注等書き入れ多し。夕顔に6丁、紅葉賀に3丁分の落丁。書風闊達、余裕のある写しぶりが映える堂々の書品。本文系統は青表紙本であるが、夕顔巻に別本の特徴を示す部分がある。

南北朝の書写と見る人もあろうが、室町時代の早い頃、おそらくは15世紀初頭に制作されたものと考えられ、この時期の物語写本には比較的珍しい大型列帖装に仕立てる。紅葉賀後遊紙左肩に「下冷泉持為卿」と筆者に関する墨書、後掲の付属文書に見える通り、古筆了音（1674～1774）の手。夕顔・紅葉賀両冊には表紙に共通した汚れがあり、虫損は少ない。賢木は表紙こそ綺麗であるものの、本文の虫損が大きい。もともと賢木巻を40年ほど以前に当館で求め、夕顔・紅葉賀は平成15年購入、別々に伝来のツレが合流したのである。

夕顔・紅葉賀に付属文書2通。1通は宝永7年（1710）5月晦日付、古筆了音に鑑定を依頼し、下冷泉持為（1401～1454）と極められたことを記す。もう1通は宝永の文書を三宅宗円のものとして判定した大正4年（1915）の備忘。少なくとも300年は別れて伝来した夕顔・紅葉賀と賢木とが鶴見の地で落ち合う、ちょっとした奇跡といえよう。なお掲出本の仲間である鈴虫は、東洋大学図書館に収められる。

展示箇所は、夕顔の花を詠んだ和歌が見られる部分。見開き右面最終行から「をりてこそそれかともみめたそかれにほのほのみ／つる花のゆふかほ ありつる御隨身してつかはず」。初句「をりてこそ」は別本の本文であり、青表紙本系はじめ通行諸本の多くは「よ

りてこそ」に作る。

6 嫁入本源氏物語 江戸時代前期写

列帖装12冊

紺地に金泥にて秋草・蓮・菖蒲・撫子等を描いた斐紙表紙（縦24.0、横18.0糎）、その図柄は丁寧に描かれてはいるが、本文内容と関係しない。表紙中央に金泥下絵具引き斐紙題簽（縦12.8、横2.8糎）を押し、本文とは別筆の定家風の手で「絵合（～手ならひ）」と巻名を書く。見返し、黄蘗色地に金銀箔散らしの他、摺文様・山水等の絵柄もあり、豪華多彩。各冊巻頭に遊紙1丁を置き、第2丁オモテより書写、每半葉9行20字程度。和歌2字下げ2行書きとし、その末は直接地の文に続く。

現存12冊はすべて同筆、近衛流を学んだかと思われ、書き入れはない。絵合・松風・藤袴・梅枝・藤裏葉・夕霧・御法・幻・橋姫・宿木・東屋・手習のほとんどは青表紙本系本文であるが、梅枝には河内本の異文が混じり、手習は明瞭に河内本の特徴を示す。ただし残念ながら手習の最終括は欠け、代わりに蓬生の1括が削綴されている。早い時期の綴じ誤りか。表紙・題簽・料紙・見返し意匠など、凝った仕上がりの書物であり、貴紳豪商の婚礼に際して製作されたものであろう。

梅枝巻、六条院の春を描く「二月の十日／雨すこしふりて御前ちかき紅梅さかりに色もか／もにる物なき程に兵部卿宮わたり給へり…」(右面7行目)の丁を開き、あわせて藤袴見返しと東屋の表紙(秋草)を展示する。

7 伝梶井宮筆 源氏物語須磨拔書

江戸時代前期写 卷子本1軸

紺色無地紙表紙（縦33.0、横19.0糎）はかなりの損傷が見られ、その左肩に外題「梶井宮様御筆」を打付書きするのは本文と別筆。端裏に「梶井宮御筆」「布田氏」と墨書、外題とはまた異なる手である。外題下に朱方形印「□□氏」・鼎形印（印文不能読）各1顆を押し、押さえ竹に紺平打紐、軸は唐木。見返しは金箔散らし・桐文様形刷りの間合紙。本紙と巻物皺の一致しない箇所があるので、後補と見るべきか。

本文料紙、金銀泥下絵の斐紙（縦33.0、横44.3糎）。5紙を継ぎ、最終料紙を直接軸木に付く。雲母引き間合紙にて総裏打ちを施す。『源氏物語』須磨巻から「月のいとほなやかに／さしいでたるに／こよひは十五夜／なりけりと」以下よく知られた章段を抜き書きする。おっとりとしたその優雅な書風は、伝称通り高い身分の人物にふさわしい。

「梶井宮」は三千院・梨本坊・円融坊と呼ばれた天台宗の門跡寺院であり、慈胤法親王・最昭法親王あたりが時代的には筆者の候補としてあげられるけれども、筆跡資料不足で特定には至らない。

下絵は野菊・桔梗・萩・籬の朝顔・薄等を瀟洒に描き、鳥・蝶をあしらう。ほどよく錆びた銀泥が、秋の野の風情を一層深めてくれる下絵である。

8 絵入源氏物語 江戸時代前期刊 小型本

袋綴60冊*

濃紺色地に蓮華唐草を艶刷りした紙表紙（縦14.3、横11.3糎）の左端に押発装が見える。表紙中央に金泥下絵斐紙題簽（縦7.7、横2.1糎）持つ原装愛すべき版本。本文四周単辺（縦11.3、横9.1糎）毎半葉11行21字程度、和歌2字下げ2行書きとし、歌の末尾を地の文に続ける。版心「桐壺 ○ 一」の如く刻す。12 絵入源氏物語 を継承した60冊構成であるが、『目案』を『爪印』と改題する。全体として保存良好、古い木箱に収める。

厚手楮紙を用い濃墨で丁寧に刷っており、巻毎に絵柄を変えた金泥下絵の手書き題簽や、上質の表紙等から見て、一種の特製本であろう。この種の小型版本は、複数帖を合冊することが多いので、60冊仕立てであることも評価されてよい。

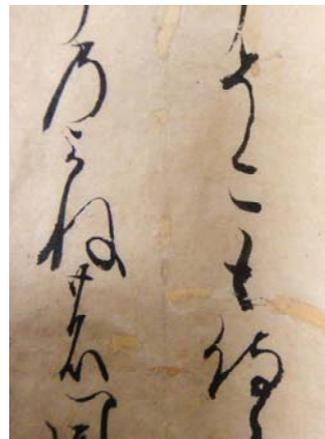
展示箇所は、秋草・紅葉が月に映える浮気な女性の庭（帚木）、露に潤う朝顔（槿）、そして籠に摘み入れられた蕨（早蕨）の挿絵。いずれにも古版らしい素朴な魅力がある。

Ⅲ鳥・虫・犬・猫

草花ほど多彩ではありませんが、鳥に限ってみても春を告げる鶯は勿論、憎まれ役の烏、戸を叩くかと聞きなされる水鶏など、小動物達はなかなかの個性派揃いです。そのすべてにご登場いただくのはまた別の機会として、今回は梟・鈴虫・蜻蛉・犬・猫を選びました。

9 源氏物語浮舟断簡 伝橋本公夏筆 内曇四半切 室町時代後期写 台紙貼1葉*

藍内曇斐紙（縦23.9、横20.9糎）に屈曲の強い清水谷流の筆跡にて14行書写。1行26～30字程度。朱の読点・傍書あり。右11行と左3行との間に折り目・綴じ穴があり、列帖装の典籍を解体したものと判明する（右図参照）。料紙に切れ目はないが、内容は不連続。当該断簡を二つ折りしたその間に、数枚の料紙が挿入されていたからである。極札「橋本殿公夏卿 [琴山]」、裏面に記入なし。古筆了佐（1572～1662）の手か。



伝称筆者橋本公夏（1454～1538）は権大納言清水谷実久の息、橋本家を継ぐ。和歌・連歌に通じ、『源氏物語』の注釈書『浮木』を撰した。また能書として知られ、相当数の筆跡資料を残す。掲出の断簡もまた、伝称にふさわしく清水谷流の特徴を示し、公夏筆と見て大過ないと思われるが、しばらく断定は控えたい。ともあれ公夏と同時代の書写ではあろう。

本文は河内本に類するものだが、独自異文もあって、系統を判断しがたい。朱はおおむね青表紙本の特色を示す。右は薫大将の意向を受けた無骨な内舎人が、浮舟付きの女房右近に嫌みを言うところ、左は浮舟巻の末尾近く、死を決意した浮舟の耳に鐘の音が響いてくる箇所。内舎人の言葉を「ふくろうの／なかんよりもいと物おそろし」と表現し（右より8・9行目）、ここに梟が現れる。『源氏物語』中では、他になにがしの院（夕顔）・末

摘花の屋敷（蓬生）で鳴いており、いずれも不気味な鳥として描かれる。愛らしい、もしくは劇的な脇役揃いの本展示にあっては異色の存在だが、その個性と存在感を評価してご登場いただいた。

10 升形本源氏物語 表紙裏に版本反故使用 江戸時代前期写 列帖装5冊

紺色地に金銀泥にて当該巻の内容に合わせて下絵を描いた斐紙表紙（縦16.7、横18.1糎）、押発装の痕跡あり。中央に金泥下絵題簽（縦12.8、横2.7糎）を押し、「すゝむし」と墨書、本文と同筆らしい。見返し、本文共紙。いずれの冊も遊紙1丁を置いて第2丁目オモテより書写。本文料紙、布目打ち厚手斐紙。每半葉11行14字程度、和歌1字下げ2行書とし、その末尾は地の文へ続ける。薄雲・篝火・鈴虫・竹河・手習のうち、鈴虫巻を展示する。本文系統は青表紙本、奥書・書き入れ等なし。竹河に1括り分の脱落あり。

竹河巻を除く4冊の表紙の芯紙に、寛永古活字版『源氏物語』葵・乙女等の反故を用いていることが、書誌学上興味深い。このような表紙製作法は、通常寛永末年（～1644）頃までに限られるからである。掲出本の書写は寛永年間より下ると思われ、古活字版反故の保管状況・写本と版本の表紙製作における技術的な交渉など、おもしろい話題を提供してくれる。

鈴虫巻のみ巻末に「蘆田文庫」の朱印があり、保存状態も他の4冊より良好。本学へは4冊が先に収まり、鈴虫は10年ほど隔てて別個に購入され、ツレであることが判明した。薄雲・篝火・鈴虫は同筆、竹河・手習はそれぞれ別筆であるので、『源氏物語』を少なくとも三筆で写している。揃い本の『源氏物語』が離ればなれとなり、たとえその一部であってもここで合流させえたことは、きわめて幸運な事態と言えよう。

後ろ足の長い、大ぶりの鈴虫が2匹描かれる鈴虫巻の表紙を展示。物語では「すゝむしは心やすくいまめいたるこそらうたけれ」と書かれるが、さて「らうたけれ（可愛らしい）」と感じられるかどうか。いかにも栄養の行き届いた風体ではある。

11 源氏物語色紙帖 伝貞常親王筆 室町時代後期写 折本1冊

薄香色地に花文を織り出した錦表紙（縦25.3、横20.5糎）、外題なし。絹地に金銀泥霞引き・金野毛・箔を散らした見返し。金銀の豪華な装飾を施した台紙11折の裏表に、内曇色紙（縦18.0、横15.0糎）を貼る。色紙は紫もしくは藍の雲を上方に置き、金泥にて下絵を加えたもの。1つの巻に対し色紙2枚（地の文の抜き書きと和歌各1枚）を当て、全体を100枚以上で構成したと推されるが、現在花宴より夢浮橋まで断続的に42枚を残すのみ。

色紙すべての右肩に古筆家2代了榮（1607～1678）の極札「伏見殿貞常親王〔琴山〕」。善本希籍の収集で知られた猪熊信男（1882～1963）の箱書「伏見宮貞常親王／源氏物語」。蓋裏に、貞常親王の筆跡であることを証する猪熊氏の鑑定識語が見える。

伝称筆者貞常親王（1425～1474）は伏見宮第4代、後崇光院貞成親王の子であり、数多くの詠作を残した。古筆家および猪熊氏の鑑定ではあるが、貞常親王の手になるものとは断定しがたい。親王と同時代か、やや下ったころの能書の筆であろう。いずれにしても『源氏物語』の本文を抜き書いた色紙のほとんどは江戸時代以降に属しており、室町時代に遡るものはさほど多くはないので、贅を尽くした装飾や42枚のまとまりと共に、

その古さを珍重したい。

展示箇所は蜻蛉巻の末尾、「あやしうつらかりける／契をつくづくとおもひ／つづけながめ給ふたぐれ／かげろふの物はかなげに」（右面）・「ありとみて手には／とられず見れば又／行ゑもしらず／きえし／かげろふ」（左面）。

(参考) 源氏物語五十四帖絵尽 豆本 文化9年(1812)刊 版本 袋綴1冊*

朱色無地紙表紙（縦9. 1、横6. 2糎）の左肩に縹色題簽（縦6. 0、横1. 6糎）を押す。子持枠中に「源氏五十四帖絵(以下破損)」、原装・原題簽の愛すべき小型本である。伝存数もあまり多くはない。書名は内題による。

この本は後に見開きを片面の絵に圧縮し、注釈的要素を加えた中本(ほぼB6版の大きさ)の『源氏物語絵尽大意抄』として生まれ変わる。こちらは相当広く流布した。

巻頭に紫式部石山寺参籠伝説を示す見開き色刷り図、序と続き、第4丁ウラより本文。本文は四周単辺(縦6. 9、横4. 6糎)内に『源氏物語』の各帖より代表的な1場面を描き、源氏香の図と和歌1首をそえる。注解・批評などは一切なく、もっぱら絵を楽しむために作られた書物であり、本の仕立て方もその趣味性を示す。巻末に出版広告と刊記。広告には掲出本も「同(雛本)源氏物語絵尽」として登載され、出版時に「雛本」と呼ばれたことを知りうる。刊記「文化九壬申年／芝神明前三島町／和泉屋市兵衛梓」。

遣水が流れる秋の庭と、飛びかう蜻蛉を展示した。昆虫ははっきりトンボとして描かれ、その頭部に点じられた朱は勿論いたずらである。

12 絵入源氏物語 慶安3年(1650)山本春正跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

紺色無地紙表紙（縦27. 0、横18. 2糎）中央に素紙題簽（縦16. 7、横3. 4糎）を押す。巻名・巻序等を刻す。本文に匡郭なく、毎半葉11行21字前後。句読点・濁点を付刻、ままた人名・官職名・地の文と心内語の区別等も傍記する。絵は片面・見開き両様、四周単辺（縦18. 7、横14. 5糎）内に山本春正の手になる大和絵風の画面が展開する。

物語本文54冊、山路の露1冊・系図1冊・引歌1冊・目案3冊を加え、これに豊富な絵を添えて親しみやすく出版、以後の写本・版本に大きな影響を与えた。2 源氏物語絵巻もその1例である。夢浮橋巻末に「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。おそらく初印は慶安3年であり、掲出本はそれに続くもの。刊行を企画した山本春正（1610～1682）は当時著名な蒔絵師、松永貞徳（1571～1653）の弟子となり和歌にも堪能であった。

展示箇所は浮舟巻、お忍びで宇治に出かけた匂宮に犬が吠えかかる。「里びたる犬共」の本文だが、絵では一匹のみ。犬も見慣れぬ親王様に遠慮してか、やや及び腰である。

13 源氏絵宝枕 正徳3年(1713)刊 巻4欠

袋綴3冊

縹色地に草花・梅・霞等の下絵を鑰泥にて描いた紙表紙(縦26.4、横18.0糎)は原装。表紙中央に朽葉色題簽(縦17.6、横4.4糎)を押し、子持ち枠中に「源氏絵宝枕」と刷る。見開き右面に本文、左に絵を配し、左右で1帖分を構成。本文は無辺無界毎半葉10行21字程度(印刷面縦約19.5、横14.4糎)、絵は四周単辺(縦19.5、横14.4糎)、版心に文字なし。第1冊1の5丁・第2冊15丁・第3冊17丁。第4冊を欠くが、他本は最終冊末尾に「正徳三年巳ノ正月吉日 大野木市兵衛」の刊記を持つ。

『源氏物語』の各帖をごく簡略に紹介し、著名俳人の発句を加えて出版、ごく趣味性の強い書物であり、『源氏鬢鏡』の内容を受け継ぎ、版面構成を手直しして印行された。伝本は希少である。

掲出本を検するに、第1冊は須磨巻の梗概で終わり第2冊が須磨の絵で始まる不自然な分巻から、第1・2冊をまとめて1冊としていたのが原態。第3冊は尋常に篝火巻の梗概と絵とが見開きにまとまるので、問題はない。以上のことから、元来2冊仕立てであった『源氏絵宝枕』をさらに分巻し全4冊として出版、その最終冊を失ったのが掲出本ということになる。

『源氏物語』の猫、と言えば女三宮の身近に飼われていたものを誰もが思い浮かべる。原文では「唐猫のいとちひさくをかしげなる」と紹介されるが、第3冊40丁オモテの猫は、どう見ても相当大きい縞模様の虎猫——あまり可愛くもなさそう——である。御簾を引き上げて悲劇の原因を作った綱は描かれていない。なお、当該の事件は『源氏物語』若菜上に書かれるが、掲出本では若菜下に割り当てる。

IV身の回りの小物

持ち主の装いや好みは勿論、人柄までも示す小道具が『源氏物語』にはいろいろ登場します。女性の気質を打ち方に表す碁、逢瀬のあとで取り交わす扇、思いを綴る文房具など、いずれも印象的な働き手です。現代にもっと生かされてよい脇役達ではないでしょうか。

14 源氏物語 小型写本 江戸時代前期写

列帖装54冊

金揉箔・雲母を散らした薄縹色斐紙表紙(縦9.5、横11.4糎)左肩に金紙無地題簽(縦7.2、横1.4糎)を押し、「きりつほ」以下巻名を墨書する。本文とは別筆。見返し、銀箔を密に蒔いた斐紙、原態をとどめるものであろう。押発装あり。各冊巻頭に遊紙1丁を置き第2丁オモテより書写、本文料紙、斐紙。まま布目打とする。毎半葉10行19字程度。和歌2字下げ2行書き、その末尾は地の文に続く。奥書・書き入れ等なし。

雲龍文を織りだした薄紅色緞子帙に帙外題「源氏物語寛永寛文頃」があり、在野の碩学森銚三(1895～1985)の筆になる。森銚三は晩年某古書肆のために書物の題簽を多く揮毫したが、掲出本にその古書肆の取り扱いを示す印はない。54帖揃いの愛らしい書物であるけれども、料紙の周囲に焼け焦げの見られる巻(桐壺)や、水濡れの痕跡をとど

める巻（空蟬）等があり、火災を逃れて伝えられた典籍と思われる。本文は青表紙本系三条西家本とほぼ同じ。書風・紙質から見て、江戸時代半ばまでは下らない時期の製作であろう。

空蟬と継子軒端萩が碁盤に向かい合う場面、「心ちぞなをしづかなるけをしへばやと／ふとみゆる、かどなきにはあるまじ、ご／うちはてゝけちさすわたり心とげに」（見開き右面1行目～3行目）を開いた。

(参考)源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾 明治14年錦栄堂大倉孫兵衛刊 折本2冊

白地に鶴・若松等を多色刷りした、波文様型押し紙表紙（縦17.6、横12.0糎）中央に紅地紙題簽（縦12.5、横2.6糎）。外題は子持枠内に「源氏五拾四帖 乾（坤）」と刻す。乾28折・坤27折、見開き2面を1図とし1巻にあてるので全54図。各冊末に刊行者大倉孫兵衛の出版広告を載せる。その広告中に掲出本も「一蕙斎芳幾画／田舎源氏五十四帖／折本全二冊」と見え、柳亭種彦『修紫田舎源氏』に由来する作品であることを明らかにする。各図は確かに『修紫田舎源氏』の墨刷り挿絵を極彩色の錦絵に変容させたもの。歌川国貞描くところの原図を、葵・源氏香意匠の紅色枠に縁取り、いかにも文明開化の派手な姿に改めるところが見所である。

絵師一蕙斎芳幾（本名落合幾次郎、1833～1904）は歌川国芳に学び、役者絵・美人画を得意とした。空蟬と軒端萩が碁を打つ有名な場面であるけれども、碁盤・碁笥はともかく手前に煙草盆が置かれているのは、江戸趣味と言うほかない（煙草が日本で広まったのは17世紀以降です）。

15 絵入源氏物語 横本 万治3年(1660)刊 袋綴29冊

紺色無地紙表紙（縦14.7、横21.3糎）の美濃版半裁本。押発装の痕跡あり。表紙中央に素紙題簽（縦11.1、横3.3糎）を押し、複数帖を合冊するので「きりつほ／はゝ幾々」の如く刷り、右下に巻序を付刻。ただし分量の多い巻は1巻1冊仕立て。本文25冊・『目案』3冊・『系図』『山路露』1冊の全29冊。夢浮橋末尾に**12 絵入源氏物語**を継承した「写本云」以下の原奥書・「小間開板之本」以下の刊語を載せ、「龍集万治三年庚子／除稔一日／林和泉掾板行」の刊記。本文・絵・『目案』等を加えて60巻仕立てとすることも、先行の絵入源氏物語と同様である。年月日と書肆名とは書風が異なるので、「渡辺忠左衛門」とあったのを「林和泉掾」と入木修正したのであろう。したがって掲出本は初印ではない（吉田幸一『絵入本源氏物語考』）。

『源氏物語』中には扇がたびたび登場し、その役割も重い。夕顔の花を載せ、後日の証しに交換し、別れの歌を書き付けるなど、さまざまの場面で印象的な働きをするが、日常生活では、視線を遮るために多く用いられる。展示箇所は紅葉賀巻、「五十七八の人」源典侍が「かはほりのえならず描きたるをさし隠し」たところである。本文では「赤き紙のうつるばかり色深き」扇と書かれる。

16 源氏物語 濔標(別本) 室町時代後期写

折紙列帖装1冊

利休鼠色地唐草文様を織りだした絹表紙(縦19.2、横13.3糎)は後補。表紙中央に藍墨流し文様の間合紙題簽(縦11.8、横3.0糎)を押し、「みほつくし」と墨書、本文とは別筆。元は仮綴じであつたらしく、現在の絹表紙の下に本文共紙の原表紙が残る。そこには「十一 みほつくし」と書かれており、並びの巻を勘案して『源氏物語』全体を37と数えた時の巻序である。薄手の斐紙を用いて折紙列帖装とするのは、物語写本としては比較的例が少ない。毎半葉10行16字程度、各丁に稚拙な手で丁数を記入。

『源氏物語』の本文を青表紙本・河内本・別本に3分して考える場合、もっとも伝本が少なく貴重視されるのは別本である。『源氏物語大成』刊行時点では、若紫・明石・濔標・絵合・松風・藤袴の6巻に別本が見つかっていなかった。その後、若紫・濔標・松風の別本が報告されており、掲出本は現在確認できる唯一の濔標巻別本である。折紙列帖装と言うやや珍しい装丁もさることながら、本文が別本に属する点が掲出本の学術的価値であり、すでに翻字と解題が備わる(池田利夫「別本「濔標」巻写本の出現」『古代文学論叢』13)。

左面4行目半ばより「ふところにまうけたるつかみ／じかき筆など御くるまどむる所／にてたてまつれり」と見える。惟光の準備のよさ・冴えた機転が、携帯用の「束短き筆」に凝縮する。

17 源氏物語小鏡 小型絵入本 寛文6年(1666)刊

袋綴3冊

藍色無地紙表紙(縦15.3、横10.5糎)左肩に素紙題簽(縦10.0、横2.5糎)を押し、「源氏こかゝみ 上(～下)」と刻す。綴糸を変えているものの、表紙・題簽共に刊行時の風体を伝える古雅な版本。小本の最初出と推されるものである。本文は四周単辺(縦11.4、横8.2糎)中に毎半葉11行、版心「小○上(丁付)」。下冊末最終丁ウラに刊記「寛文六丙午年林鐘吉日」。

『源氏物語』梗概書中最も流布し、多様な伝本に恵まれた『源氏小鏡』は、連歌の付合を持つことが特徴のひとつである。伝本の多彩さは、版本のみについて言っても古活字版以下18種、細かく見れば30種ほどは数えうるであろう。絵入本は明暦3年(1657)版に始まり、美濃本・半紙本・中本・小本と書型もさまざま、絵柄についても先行の版本を継承するとは限らないが、掲出本は明暦3年版に倣う。今回は真木柱を展示したので、明暦版(下図参照)と比べていただきたい。

『源氏小鏡』中冊、玉鬘のもとへ出かけようとして入念な身繕いをする鬚黒大将に、北の方が火取り香炉——薫香を焚きしめるための香炉——の灰を浴びせかける。顔をそむける左側の人物が鬚黒、対座する夫人の手にお椀のようなものが描かれており、これが火取り香炉である。『源氏物語』の本文では「火取りをとりよせて、殿のうしろに寄りてさといかけたまふ」とあり、向かい合って座るのではない。『源氏小鏡』は「(北の方は)さらぬやうにておき出てひとりなげさせ給ふ」(見開き左面9行目以下)と文章を変更している。灰まみれの鬚黒は、当然外出を中止した。



(参考)源氏香 江戸時代後期写

折本1冊

暗紫色地に菊文を織りだした緞子表紙（縦15.3、横6.1糎）の小型折り本。外題なし。見開きの桐壺の殿舎図より始まり、以下1面上下に2図の源氏香と巻にちなむ挿絵を載せる。夢浮橋も見開きとし、全14折。源氏香は鍍泥らしく、当初は金色燦然たるものであったろうが、現在は錆びて緑色に近い。挿絵は素人の手すさびか。ただし、細やかで洒落た絵柄となっている。

展示箇所は、藤袴～横笛の8帖分4面。真木柱(右端下)では、こぼれた炭火と灰そして香炉が描かれ、鬚黒夫妻のもめ事を表現する。